

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

Obsessive-Compulsive Disorder in Adults with Autism Spectrum Disorders Comorbidity: Examining Neuropsychological Features

著者	MIYATA Haruko
著者別名	宮田 はる子
その他のタイトル	自閉症スペクトラム傾向を持つ Obsessive-Compulsive Disorderの成人患者の神経 心理機能の傾向の検討
page range	1-95
year	2018-03-24
学位授与番号	32675甲第435号
学位授与年月日	2018-03-24
学位名	博士(学術)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://hdl.handle.net/10114/14077

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	宮田 はる子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 662 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 末武 康弘 副査 教授 小野 純平 副査 帝京平成大学 准教授 田代 信久

**Obsessive-Compulsive Disorder in Adults with Autism Spectrum Disorders
Comorbidity: Examining Neuropsychological Features**

〔1〕本論文の受理および審査の経過

宮田はる子氏は、本大学院人間社会研究科博士後期課程人間福祉専攻に 2011 年 4 月に入学後、指導教授・末武康弘、副指導教授・小野純平より研究指導及び博士論文作成指導を受けてきた。宮田氏は論文提出に必要な単位を取得しており、また論文構想発表・論文中間発表を行い、法政大学大学院紀要および複数の学術誌に論文を発表する等、博士論文提出の条件を満たしている。

2017 年 9 月 30 日に宮田氏から博士論文審査願及び学位請求論文が提出されたことを受けて、同年 10 月 4 日人間社会研究科教授会において論文受理審査委員会（委員：布川日佐史、小野純平、末武康弘、眞保智子）が設置され、同年 10 月 18 日に委員会が開かれた。いくつかの要望が出されたが、論文の構成及び内容は審査に値すると評価され、同年 10 月 25 日人間社会研究科教授会において、論文審査の受理が承認されると共に、主査・末武康弘、副査・小野純平、副査・田代信久（帝京平成大学准教授）の 3 名による論文審査小委員会が設置された。各委員が論文の査読を行った上で、2017 年 12 月 17 日に口頭試問と審査を実施し、3 名の審査委員全員が博士論文として合格に値すると判定した。

〔2〕論文の主題と構成

本論文は、成人の強迫性障害（Obsessive-Compulsive Disorder: OCD）患者、その中でも自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorders: ASD）が基盤にあることが疑われ、その二次障害として強迫症状を呈していると疑われる患者の認知機能の特性を解明し、あわせて適切な治療及び支援へつなげるための評価方法を検討することを目的として執筆されたものである。

論文の構成は以下のとおりである。

Chapter1: Introduction

- Purpose of this study
- Background of this study
- Significance of this study

Chapter 2: Study 1: Literature Review

- Introduction
- Neuropsychological findings in OCD
- Neuropsychological findings in ASD
- Discussion

Chapter 3: Study 2: Comparison of WAIS-III between OCD (ASD-) and OCD (ASD+)

- Introduction
- Method
- Results
- Discussion
- Conclusion

Chapter 4: Study 3: Comparison of Neuropsychological Tests between OCD (ASD-), OCD (ASD+) and Healthy Controls

“Neuropsychological Tests in Adult Patients displaying Obsessive-Compulsive Disorder with Autism Spectrum Disorders Comorbidity”

- Abstract
- Introduction
- Material and Methods
- Results
- Discussion
- Conclusion
- Limitation of this study

Chapter 5: Conclusion Remarks

- Implications for further research
 - Study 2
 - Study 3
 - Assessments
- Limitations
- Reviewing the role of Neuropsychological Tests

[3] 論文の概要

第 1 章では、強迫性障害（OCD）及び自閉症スペクトラム障害（ASD）の病態や治療方

法等の現状、神経心理検査の活用に関し概観し、課題や問題点を検討しながら、本研究の着想に至った背景、意義が論じられている。OCDについては、その脳機能を中心とした病態解明が進み、一定の治療方法が開発され、その効果も認められる中で、治療の長期化や難治化を示す患者もみられることが示されている。一方、成人のASDについても社会生活における困難をはじめとした諸問題が注目されており、臨床の場でOCDと診断されている患者の中にASDの併存が疑われるケースが少なからず存在していると考えられる。これまで、OCDとその神経心理機能の研究や、ASDを含む発達障害の研究において、特に遂行機能や感情認知を中心とした研究が蓄積されてきており、OCD、ASDともに遂行機能(実行機能)の低さを示す研究知見が多数存在するが、結果にばらつきがあり、一般化はされていない。結果のばらつきの1つの理由として、OCD患者の一部に他の精神疾患が併存している可能性が示唆されており、ASDとの併存を示す研究も出てきている。成人以前までにASDの存在が見過ごされ、その後二次障害によって初めて医療機関に受診するなど、患者によっては誤った診断・治療を受けることもある。こうした患者への負担を少しでも避けるための方法として、神経心理検査を使用することで認知機能の特徴を検討し、アセスメントツールとして活用できないか、という考えが本研究の着想となった。

第2章では、関連する先行研究の検討が行われている。おもな検討対象は、神経心理検査を使用してOCD及びASDの遂行機能を中心に健常群との比較を行った先行研究である。神経心理検査を使用したOCD及びASDの研究は数多く存在し、OCD、ASDともに遂行機能の障害を示す傾向があると言われてきた一方で、遂行機能や記憶など特定の神経心理機能に障害は認められないとする結果を示す研究も少なからず存在し、いまだ一般化には至っていない。その理由として、研究によって使用されている検査が異なっていることや、測定している機能の違いなどから結果の相違が生じているとも考えられ、単一の検査のみで機能障害の有無を判定することは困難であること、幅広く機能を測定できる検査を実施し、特徴を捉えていく必要があること等について、先行研究の検討によって確認している。さらに、OCD患者の一部に他の精神疾患の併存を示唆する研究も多く、先行研究の結果のばらつきへの影響要因の一つとしても考えられることから、ASDの併存を考え、検証を進めていく必要性を論じている。

第3章と第4章は、OCD患者を研究対象とした実証的研究である。これらの実証的研究においては、研究へのエントリー候補者に対して、研究対象者としての研究基準を満たしているかどうかを確認するためのスクリーニングが、自記式回答、一般知能検査、精神科医による構造化面接によるアセスメントを通して入念に行われている。研究基準を満たしたOCD患者の研究参加者は、発達専門の複数名の精神科医によりASDと診断できる者:OCD(ASD+)と、ASDと診断できない者:OCD(ASD-)とに群分けされ、OCD(ASD+)は13名、OCD(ASD-)は22名、合計35名を患者群の研究対象者としている。なお、対象者の研究基準の一つにはIQ>80が設定され、Wechsler Adult Intelligence Scale – the third version(WAIS-III)を患者群全候補者へ実施し、確認が行われている。

第3章では、研究2として、このWAIS-IIIのIQ三種(全知能指数、言語性、動作性)と群指

数(言語理解、知覚統合、注意記憶、処理速度)、各下位検査の評価を、OCD(ASD+)と OCD (ASD-)の二群にて、それぞれの平均値の二群比較(二標本の t 検定)、及びそれぞれの群の平均値と評価点の平均値(10)とIQの平均値(100)との比較(1サンプルの t 検定)を行っている。二群間比較では有意差が認められなかったが、それぞれの群ごとの平均値の比較においては、OCD (ASD+)では処理速度の群指数(90.08【SD=13.39】 vs. 100)で有意に低さが認められた。また、有意差は出ていないが、OCD (ASD-)も処理速度の遅さは認められ、全体的に両群のプロフィールには類似した特徴が示された。

第4章では、研究3として、上記患者群2群に加えて、研究対象基準を満たした健常群(29名)を加えた3群比較を行っている。研究基準を満たした参加者全員に対して14種の神経心理検査が実施され、収集されたデータが分析、検討されている。複数の神経心理検査が幅広く実施され、遂行機能、記憶、感情認知、空間認知、注意力、処理能力など多岐に渡る神経心理機能が検討され、三群の比較及び検証が行われている。その結果、これまでのASD研究ではASD特有の傾向としてみられることの多い感情認知において、OCD (ASD+)の値に有意差はみられなかった。また、遂行機能においても、OCD(ASD+)及びOCD(ASD-)どちらの群も、健常群に対して有意差はみられず、遂行機能が顕著に低いということを表す結果には至っていない。一方、OCD (ASD+)が有意に低かった8項目は主に処理速度であるが、全ての処理速度の項目で低い結果となっていない点に着目することができる。つまり、通常は処理速度に顕著な問題はないが、特定の状況下や場面では処理速度の低下につながる要因がある可能性が考えられた。その要因として、検査ルールの曖昧さや複雑さが感情の統制を困難にさせ、処理速度を阻害する要因になっていると考えられること、さらに、ポイントを見ると、全体をとらえることの困難さ(中枢性統合の弱さ)、視覚情報を言語化する作業の困難さなど、一般的にASDにみられるとされている傾向が処理能力に影響している可能性があることなどが考察されている。全体的にOCD(ASD-)とOCD (ASD+)の値は、一見したところ類似しているようにみえるが、神経心理機能に影響する要因はそれぞれ違っている可能性が示唆された。

第5章では、全体を通しての総括及び研究の限界、今後のさらなる研究への示唆がまとめられている。第4章の結果を受けて、第3章の研究2の結果の追加考察として、WAIS-IIIにおける両群の処理速度の遅さにも両群特有の異なる要因が考えられる可能性が示唆されている。つまり、OCD(ASD-)は認知の柔軟性の欠陥、OCD(ASD+)は視覚と作動記憶の処理の困難による、別々の要因によって両群の結果が類似したものになったのではないかと考察されている。研究3のまとめとしては、複数の心理検査の実施により、全ての処理速度の項目で健常群との有意差が認められたわけではないこと、そしてOCD(ASD-)とOCD (ASD+)群での有意差の出現場面の違いがみられたことから、両群それぞれの処理速度の機能に影響している要因が違うのではないかと、という考察に至ったことがまとめられており、研究全体を通して、OCD (ASD+)は、通常言われている遂行機能の欠陥というよりも、遂行機能を正常に動作させない場面や状況の影響が介在している可能性が示唆されている。また、こうした問題については、検査結果のデータによる数量的アプローチのみの比較では検証困難であり、神経心理検査を使用しながら、同時に質的なプロ

一ちも今後必要であることが提起されている。また、アセスメントにおいて、対象者本人による自記式のものだけでなく、検査者／医師／心理士が同様の状態を客観的にアセスメントする、主観的側面と客観的側面の両面からとらえるデータが必要であることも論じられている。本研究全体を通して、すでに一般化されて論じられることの多いOCD及びASDの傾向に関する特徴なども確認されたが、それ以上に、それらにとらわれずにさらに詳細な検証が必要であることが論じられている。最後に、OCD及びASDに関する今後のさらなる病態解明及び有効的な患者支援のために、より精緻なデータや知見が蓄積される必要性が述べられている。

〔4〕論文の総合的評価

本論文は総合的に見て、以下のように評価することができる。

第1に、本論文は、成人の強迫性障害(OCD)の患者の中に自閉症スペクトラム障害(ASD)を併せ持つ人たちが存在することに着目し、その神経心理機能の特徴の解明に実証的に取り組んだ点において評価できる。ASDを併せ持っているかどうかについては、OCD患者群に対して、発達の専門精神科医がASD+/ASD-の判定を行っていることを基準としており、妥当性の高いグループ分けが行われている。こうしたグループ分けによる神経心理検査の比較を通じた実証的研究であるという点で、本論文は先行研究にはない厳密さとオリジナリティを有していると言える。

第2に、本論文では、OCD患者のASD+/ASD-による比較だけでなく、健常群を加えた研究が遂行されている。しかもOCD患者群、健常群ともにIQ>80を基準としてサンプリングが行われている。従来の研究では教育年数が基準値として用いられることが多かったが、IQが神経心理機能に影響する可能性も考えられることから、IQを基準として採用したうえで、OCD(ASD+)群、OCD(ASD-)群、健常群の比較が行われている。こうしたサンプリング及び群間比較の手続きも、従来の先行研究にみられない本論文のユニークな点であると言える。

第3に、本論文(特に第4章)では、上記の3群の研究参加者全員に対して14種ののぼる神経心理検査が実施され、収集されたデータが詳細に分析、検討されている。これほどの種類の神経心理検査をOCD患者に実施した研究はこれまでにほとんどなく、また本論文ではOCD患者をASD+/ASD-に分け、そこに健常者のデータも比較のために用いるという、非常に入念かつ詳細なデータ収集と分析が行われている点で高く評価されるものである。一般に、こうした多数の検査による研究においては、研究参加者に負担や疲労をもたらしがちであるが、今回は研究チームによるケアが適切に組み込まれており、その点でも研究参加者がもつ本来的な能力に近い値が測定されていると考えられる。

第4に、本論文によって明らかになった知見としては、特に以下のことが評価できる。これまでもOCDとASDも処理速度の遅さは広く認識されていたが、本論文では複数の神経心理検査を実施することで、全ての処理速度の項目で健常群との有意差が認められたわけではないこと、そしてOCD(ASD-)とOCD(ASD+)群での有意差の出現場面の違

いがみられたこと等から、両群それぞれの処理速度の機能に影響している要因が異なっている可能性が示唆された点である。単一、もしくは2～3の神経心理検査の比較研究は数多く存在しているが、そこでは影響因の考察をすることは困難であり、本論文における複数の神経心理検査の実施の意義を認めることができる。

第5に、本論文の考察によってもたらされた今後の研究への示唆については、以下の点が評価できる。まず、OCD、ASDともに非常に複雑な要因から形成されている可能性が高く、単一あるいは少数の心理検査の結果から、その要因を明確化することは困難であると示唆されている点である。本論文は、より多面的で多角的な観点からの理解の必要性を示している。また、「OCDは遂行機能が低い」、「ASDは処理速度が低い」といった一般化に対しては、本論文では慎重な立場をとることの重要性が示唆されており、今後ともさらなる研究によって詳細に検討される必要があること、そしてそのためには、検査結果の数値だけでなく、行動観察や客観的アセスメントを含めたより総合的な研究の遂行の必要性を示唆している点も、この分野の研究の進展に対して価値ある提言であると言える。

本論文の課題としては、次のことを指摘しておきたい。

第1に、本論文を構成する実証的研究が研究対象としたのは、OCD (ASD+)群13名、OCD (ASD-)群22名、健常群29名だった。厳密なスクリーニングとアセスメントが実施されたことの1つの帰結として、研究参加者の人数がある程度制限されてしまった点が、本論文の課題であると言えるだろう。本論文における結果と考察をさらに明確化し、深めていくためには、より多数の研究参加者を対象とした継続的な研究が行われることが求められる。

第2に、本論文の成果は数量的な研究の範囲内にあり、この成果がOCDやASDの患者の臨床や支援の中でどのように貢献できるのかはまだ十分に明らかにされていない。本論文にも書かれているように、検査結果の数値だけでなく、行動観察や客観的アセスメント、質的研究を含めたより総合的な研究が遂行される必要がある。

第3に、本論文が指し示す方向性としては、OCDとASDという、これまでは同一研究の中で同時に扱われることが少なかった病態に対して、神経心理検査というツールを用いることで同時に分析し、検討することが可能であるという展望が開かれたと言えるが、そこには理論、概念、方法論等をめぐるより根本的な議論が必要であるとも言える。こうした根本的な議論に対しても主体的に臨み、さらに質の高い研究を展開していくことが望まれる。

〔5〕論文審査結果

以上により、論文審査小委員会は、宮田はる子氏提出の論文「**Obsessive-Compulsive Disorder in Adults with Autism Spectrum Disorders Comorbidity: Examining Neuropsychological Features**」について、博士(学術)の学位が授与されるのに十分な資格を有するものとの結論に達した。

以上